

此岸ノ鬼

夜十喰

江戸の時代より、人の生を喰らい、己の欲を満たす彼岸の怪物『喰魔』。

そんな『喰魔』の脅威から人の世を守る為にその力を振るう7人の強大な力を持つ『鬼人』と呼ばれる者達がいた。

彼らは表舞台に立つ事なく、影から人々の安寧を護って来た。

そして時は経ち現代、未だに消息を見せない『喰魔』の脅威に立ち向かうのは、かつて存在した7人の『鬼人』の血を引いた7つ家からなる組織『鬼掟七家』。代々受け継がれて来た使命を胸に、彼らは『喰魔』を滅する事が出来るのか。

※この小説は読者参加型です。

下記のページ(活動報告)にてキャラ募集を行っております。興味がある方は奮ってご応募いただけると有難いです。

←
←
←
←

<https://syosetu.org/mode=kappaoview&ki>

d
2
1
4
8
6
6
8
u
i
d
2
5
5
5
4
2

目次

現代ノ鬼

月は記憶と共に悪夢を覗く

悪夢に沈む月は微かな音に手を引かれる

鴉、戦下に立つ

現代ノ鬼

仮募集をしてから約2ヶ月……ようやく投稿することが出来ましたー!!

やっとリアルで時間が作れまして、これからボチボチ更新して行こうと思います。

初のオリジナル作品なので、拙い部分も多いと思いますが、アドバイス、感想などドンドンいただけると嬉しいです。

それでは早速お楽しみ下さい。

1 現代ノ鬼

時は魍魎魍魎が犇めく江戸の時代。人々はすぐ隣にある死への恐怖に日々打ちひしがれながら生きていた。人々に恐怖を植え付けた存在は、突如現れ、無慈悲にその力を振るった。人は無力だった。どれだけ抵抗しても、どこへ逃げようと、どこへ隠れようと、ヤツらはどこにでも現れ、その禍々しく圧倒的な力で、生への渴望

を嘲笑う様に、人を人だったモノに変えた。

人はヤツらを、生を喰らう魔物『喰魔』^{クラマ}と呼んだ。

喰魔の脅威は国の各地に及び、人は絶滅の一途を辿るのみと、この世に絶望し、生を諦めかけた——そんな時だった。

希望を失い、絶望する人々の前に、彼らは突然現れた。

襲い来る喰魔を次々と倒し、葬って行く彼らの姿を、人々の目に焼き付いた。今まで全く歯が立たず、出会えば死ぬしか無いと、そう思っていた絶望の権化たる存在が、いとも簡単に倒させて行く光景を目の当たりにした人々は、喜びも忘れ、その場に立ち尽くすことしか出来ずにいた。

生を乞う人々の前に颯爽と現れ、喰魔を撃退したのは、鬼の仮面をつけたおそろく10代後半から20歳前半くらいであろう7人組の男女だった。

『よく頑張った。よく生きた。よく腕いた。後は拙者たちが切り開こう。明日の、明後日の、未来の、さらにその次の未来を』

瞬く間にその場にいた喰魔を全て倒した彼らのうちの1人が仮面で見えない口を開きそう言っていると、彼らは散開するように、すぐにその場を去ってしまった。

その時、人々の目には、颯爽と駆ける彼らの背中にそれぞれ1体ずつ、計7体の異形の影が映ったという。

それっきり、人々は彼らの姿を見る事は二度と無かった。しかし同時に、人々が喰魔を目撃したのも、その日で最後となった。

人々は彼らを神の遣いとして崇め奉り、姿なき彼らに感謝を注いだ。

そして、鬼の仮面をつけた彼らは、人々にある名で呼ばれる様になり、人々はそ

の名を後世に伝説として言い伝える様になった。

その名は

『オニビト
鬼人』

彼らの尽力あってか定かでは無いが、その日以来人々が喰魔に襲われることも無くなり、あまつさえその姿を見ることがすら無くなった。

そして時が過ぎるといふことはいかに無情か、人々は、次第にその恐怖や脅威、更にはその存在すらも、記憶の中から消し去っていった。その後、瞬く間に数多ある伝承からもその存在が消えた喰魔は、知る人ぞ知る空想上の生物として認識される様になった。それにつられる形で、鬼人の存在も口から語り継がれる寓話となり、喰魔と鬼人の存在は完全に人々の記憶の中から消え、この此岸の地から消滅し

たものと思われていた。

しかし、それは全くの間違いであった。人々の知らぬこの世の裏で、喰魔はその力を弱体化させることもなく、この此岸の地にその脅威をふるっていたのだ。ならなぜ、喰魔たちは表の世界の人々にその姿さえ目撃される事が無くなったのか。それは、喰魔と共に人の記憶から消えたはずの誰も知らない英雄達が、誰に認識される事もなく、静かに、しかし確実に、人々を、この此岸の世を守ってきたからである。

彼らの誓い、力、血、使命は脈々と途切れる事なく受け継がれた。その過程で、彼らは各々に子孫繁栄に努め、江戸の時代が終わる頃、彼らは『緋蜂家』^{ヒバナチ}『辻凧家』^{ツジナギ}『叶家』^{カナノウ}『淵上家』^{フチガミ}『兎宮家』^{トミヤ}『戒血家』^{カイチ}『蜜芭家』^{ミツバ}の7つの家に分かれ、それぞれが1つの組織となり、喰魔の撃退に勤めていた。

そして、この7つの家を総じて【鬼掟七家】^{キテイシチケ}と呼んだ。

そして現代、鬼人の血は途絶える事なくこの時代まで行き届き、現代の鬼人たちは今なお消息を見せない喰魔との戦いに日々身を投じている――

「ハア…ハア…ハア……!!」

――その最中……

「ハア…ハア…クソッ!! 一体なんだってんだよ!？」

ここはとある山の奥深く。辺り一面が闇に覆われた真夜中の森の中で、1人の男が暗闇の中を怯えた様子で必死に走っていた。男の耳には無数をピアスが開けられており、首や指にはジャラジャラと沢山のアクセサリーがつけられている。いかにもチンピラですと言わんばかりの男は、葉の間からわずかに差す月の光を頼りに、生い茂る草木を手で掻き分け、切り傷だらけの手や泥だらけになった服と靴に目もくれず、男はただひたすら森の中を駆ける。

「ハア…ハア…なんでっ……俺がこんな目に……いつまで付いてくんだよ！クソがッ！」

怯えた様子を見せる男だったが、次第にその感情が怒りに変わっていく。どうやら男は何かに追われており、逃げ惑う自分を客観的に見て、自分の無様な姿に怒りの感情を覚えた様だった。

「上等だ！だったら完全に撒いてやるよ!!」

そう言うのと、男は走るスピードを上げた。男は息を切らしながらも、そのスピードを落とす事なく走る。それどころかこの視界がほぼ真っ暗のこの状況で、男は無駄のない動きで森を一直線に抜けていく。その動きだけで、逃げるこの男が只者で

は無いことは一目瞭然だろう。では逆に、それほどの動きを見せる男が逃げ惑う相手とは一体どんな奴なのか、それは今まさに追われている男自身ですらその姿を監視しておらず、分かっていない。ただ、男の直感が告げる。決して追いつかれてはならないと。

「ハア……どうだ……クソ野郎……!!……ハア……これだけ走れば流石に撒いただろ……ハア……ハア」

男は、一度立ち止まり、後ろを振り返る。そこには誰もおらず、ただ木々が風に吹かれ、不気味に揺れているだけ。

「……ハア!!……ここまでは流石に追って来ねえようだな……つと!？」

その事に安心し、今まで身体に入っていた力を抜き、その反動で足が数歩後ろへ下がった時、男の足に太い木の根っこが引っかけかり、バランスを崩した男が後ろに倒れかけたその時——

ヒュンツと言う風を切る音とともに、男の首から血がタラーツと流れた。

「え……あ……はあアア!!!」

あまりに突然のことに驚きの声を上げる男。痛みのする首に手を置く。そこには確かに血が流れていたが、幸い傷の深さは2、3ミリ程度で、致命傷になるほどの傷では無かった。男は驚きながらも安堵するが、手に広がる赤い血を見て慌てて辺りを見回す。しかし、周りを見渡してもやはり誰もいない。人の気配すらも感じない。男がその事実を認識した時、同時にとてつもない恐怖感に襲われた。加えて自分が木につまづいていなければ、確実に首をハネられていた事実が、更に男に恐怖を植え付ける。

「ウアアアアアアッ!!!」

男は再び逃げ出した。しかし、今度は先程のような後ろを振り返る余裕は無く、今度こそまさにただ逃げ惑うだけだった。

「ハア……ハア……!!クソッ!!クソクソクソッ!!!」

男は再び必死に走る。恐怖を紛らわすように声を漏らしながら。

そして男はようやく森の出口までたどり着いた。

「ハア……!!森を抜ける!もうちょい……!!」

男は、森を出て相手を目視さえすれば返り討ちに出来るという、恐怖している事に対する負け惜しみの様な考えの中、ようやく森を抜けた。

しかし、その先は――

ザパーンッ!! ザアー! ザアー! ザパーンッ!!

「……はあ!？」

森を抜けた先は、どこにも逃げ場の無い、高く荒々しく打ち付ける荒波が下で待つ断崖絶壁だった。

これ以上逃げ場が無いことを理解した男は、来た道を振り返る。その顔は、覚悟と恐怖が混在した様な、そんな表情で満ちていた。

「なんなんだよ!! いい加減姿を見せやがれ!!」

男は振り返り、森に向けて叫ぶ。

「……………」

男の声が森の闇に消えていく。

「……………」

男は黙ったまま、闇の中を鋭い眼光で睨みつける。

『はぁ……さっさと諦めれば良かったのに、めんどくせえな……』

「……!?!?」

男の問いかけに答える様に、森の闇の中から人間の男の声が聞こえて来た。男はその声を聞き肩をビクッと震わせる。

そして、ザクツザクツという足音を立て、声の主が闇の中から歩いてくる。少しずつ、その姿が満月の光の元に照らし出される。

「———ッッッ———!!」

男は月明かりに照らし出された人物の姿を見て、戦慄した。

満月の光が照らし出したのは、黒いモッズコートに身を包み、黒いズボンと黒い靴。更に黒い手袋まで。全身を黒で覆った人間だった。そして、特に目立ったのは、その顔につけられていた不気味なペストマスクだった。更にその人物の腰には、黒い刀が添えられているのが男の目に入る。

『もう逃げ場はねえよ。さっさと諦めろ』

ペストマスクの男は、逃げてきた男に向けて、再び諦めるよう促す。

全身黒づくめの不気味な男の姿をその瞳に写した男は、先程までとは比べ物にならない程に背筋を震わせ、心底怯えた様子を見せる。

「ハア、ハア、ハア、ハア…!!」

次第に男の呼吸が速くなっていく。なぜここまで男が怯えるのか、それは彼自身

が今自分の目の前にペストマスクのいる意味が理解出来たからである。

ペストマスクの男の目的。それは自分を殺しに來たのだと。

「なんなんだよ!? なんでお前みたいな奴が、俺を追ってきてんだよ!? 俺は何もしてねえ! 何もやっちゃいねえんだよ!」

男は突然、必死に自分で弁明を始めた。声を荒げ、必死に叫ぶ。しかし、ペストマスクの男が彼の弁明を聞き入れる事は無く、ペストマスクの男は一度ため息をつくと、心底めんどくさそうに口を開く。

『はあ……ヒバチナオエ緋蜂直衛。27歳。1年半前、一般人男性に対する恐喝・暴行・脅迫。その約2ヶ月後に、一般人女性に対する恐喝・脅迫・暴行・強姦。更にその数ヶ月後に別の一般人女性に対しても同じ犯行を行なっている』

ペストマスクの口から次々と出てくる罪状の提示に、逃げてきた男、緋蜂直衛の顔色がサァーッと引き、青白くなってしまっている。

『まだ他にも結構あるな。これだけの事をしてきたんだ。流石に何もやって無いっ

てのは無いんじゃないのか？』

「そ、それをやったのは俺じゃねえよ！お、俺は…そう！さ、誘われただけで、やってねえ！断ったんだ！」

直衛は必死に叫ぶ。自分は無実だと。自分は何もしていないと。しかし、明らかに動揺が、その言葉が嘘である事を物語っていた。

『じゃあ誰に誘われたんだ？そして、お前はそいつがこの犯行を行うと分かっているが、なぜ何もしなかった？』

「そ、それは………」

直衛の明らかな嘘に、ペストマスクは再び大きなため息を吐いた。

『はあ……』

ペストマスクのため息に、直衛はビクッと体を震わせる。

『嘘をつくのはお前の勝手だが、俺に対してそれは自分で自分の首を絞めているのと同義だぞ？』

「ど、どういう事だ………」

まるで嘘が分かるという様なペストマスクの言い草に、直衛は更に動揺し、声を

荒げる。

『お前が知る必要はねえよ』

ペストマスクは一言そう言い捨てると、腰に添えていた刀を抜き、刃の先を直衛にむけこう言い放った。

『お前は俺たちの掟を破った。故に俺は、お前をこの世から排除する。それだけだ』
ペストマスクは冷酷に淡々と、直衛に死を告げた。

「ふ、ふざけるなアアアアアアアア！！！」

自身への死の宣告を受け、直衛は顔を真っ赤にし、怒りに震えだす。瞳孔が開き、額に血管が浮き出て、喉がはちきれんばかりに声を上げる。

「ふざけるな！こんなところで死んでたまるか！いいのか!?俺は緋蜂家の人間だぞ!?こんな事が許される訳がない！俺の頭首が許すはずがねえ!!」

今直衛が発した“緋蜂家”、これは直衛が自分の命を繋ぐ為に残された数少ないカードの1つだった。少ないカードだったが、これには直衛も絶対の自信があった。これで自分は助かる。相手は自分に何も出来ない。僅かな希望を自身の中で少

しずつ膨らませていく直衛。しかし、その希望も簡単に打ち碎かれる事になる。

『この件はお前んとこの頭首様も承諾済みだ』

「……………は？」

予想外の相手の解答に、一瞬直衛の思考が停止する。

『だから、テメエは自分の家に、一族に、家族に、見放されたんだよ』

直衛が理解するのを拒んだ結果を容赦なく叩きつけるペストマスク。

「う、嘘だ…嘘だ!! そんな訳がない!!」

直衛は必死に否定する。嘘だ。ありえない。何かの間違いだ。そんな言葉を頭を抱えながらひたすら叫ぶ。

そんな直衛を見たペストマスクは、彼が大きな勘違いをしている事を理解し、三度大きなため息を吐いた。

『はあ……お前は何か勘違いをしている様だから言うておく。本来俺の行動に頭首の許可も承諾も必要無いんだよ。お前の処分は決定した。これはどう足掻こうと覆

らねえ』

ペストマスクで隠れた口から、容赦の無い言葉が次々と吐き出される。直衛は堪らず地面に膝をつき、顔を地面に向ける。

『掟を破った者を抹殺する。それが、俺の、俺の家・に与えられた役割だからな』

直衛の呼吸が更に荒くなる。血の巡りがドンドン速くなり、全身の血管が皮膚から浮かび上がっている。全身の幹線から汗が溢れ、強膜が赤く染まっていく。

『というわけで、これより対象者の排除を執り行う』

その言葉を聞いた瞬間、直衛の中で恐怖心が怯えから怒りに変化した。直衛は地面に向けていた顔を勢いよく上げ、満月の浮かぶ夜空を仰ぐ。

そして――

「黙れエエエエ!!」

現実を否定するように直衛が声を張り上げる。すると、彼の周りの空気が大きく揺らめく。よく見ると、彼の身体からゆらゆらと赤黒いオーラの様なものが溢れ出

ていた。彼は膝に手を置き、肩をダランとさせながらのっそりと立ち上がる。顔を下に向けながら、ペストマスクを睨みつける。

「だったら簡単だ！ テメエを殺して、俺は生きてやる！！」

彼はこの時から既に、冷静な判断など出来ていなかった。目の前にいるのがどれだけ強大な相手なのか、もちろんそんな判断など出来ておらず、ましてや戦術など皆無。彼の頭の中にはただ、自身の「力」で相手を打ちのめし、殺すことしかなかった。

そして、直衛は満月の浮かぶ夜空に向けて

「討ち滅ぼせ！ 【ギョウキ驍鬼】！！」

口上の如く添えられた言葉に続き、直衛は1つの“名”を叫んだ。

その瞬間、今の今まで何のいなかった直衛の背後に、夜でもクッキリ見えるほどの赤黒い影が現れる。その赤黒い影は、次第に夜の闇に溶ける様にゆっくりと消えていく。

『……っ』

赤黒い影が完全に消失する。すると、影が漂っていた場所に、一体の異形が現れた。

突然現れた異形は、全身を血の様な赤黒い皮膚で覆い、人型で二本の足で立ち、同じく二本の腕が生えている。腰から下には動物の毛皮の様なものをズボンの様に履いており、更に口には大きく鋭い牙が生え、目の強膜は真っ黒に染まり、瞳孔は金色に輝いている。そして異形の右手には大きな鉈の様な刃物が握られており、その額には、皮膚と同じ色の二本の角が生えていた。

その異形の姿はまさに、日本に古来から言い伝えられている怪物、【鬼】そのものだった。

『グルラアアアあああ！！！！！』

驍鬼と呼ばれた鬼らしき異形の生物は、激しい咆哮を上げるとともに跳躍すると、直衛の前に着地し、彼を守る様に手に持った鉈をペストマスクに向けた。

『グルルウウウ！！』

まるで犬が威嚇するような低い唸り声を上げる驍鬼。鋭い牙をギリリと覗かせた口からだらしなく涎を垂らし、殺意に満ちた眼光でペストマスクを睨みつける。

「ははっ！俺が抵抗しないんでも思ったか？生憎と俺は人を殺す事を躊躇するほどあまちゃんじゃ無いんだなあ！どうせ逃げ切れねえならテメエを殺すまでだ！！」

形勢逆転とでも言いたいのか、直衛は突然自分が優位に立ったような口ぶりで話

し出す。

対するペストマスクは、異形の怪物を目の前にしても、鉈を向けられても、殺意に満ちた視線を向けられていても、一切の動揺も恐怖も怯えも見せない。

『はあ……………』

「ああ？」

するとペストマスクは、直衛対面してから何度目か分からないため息を吐き、直衛に向けていた刀を下ろした。

『心底めんどせえ……結局死ぬんだから抵抗すんなよ。鬼』まで顕現させやがって……はあ……』

ペストマスクはそう言うのを鞘に戻し、完全に直衛を舐めたような声色で言い放つ。

『ん？ 遺言は済んだか？ もうちょっと時間必要か？』

「——っ!!」ピキッ

ペストマスクのまるで自分など目に写っていないとでも言いたげな言葉に、直衛の怒りが限界を迎える。

「やれエ、驍鬼!!あのクソ野郎の四肢を腕いで細切れにしろオオ!!!!」

直衛の指示を聞き、驍鬼は右足を軽く後ろに引き、重心を落とす。そして、引いた右足に力を込めると右足が地面にめり込み、地面を力の限り蹴る。

『ゴルグアアアア!!』

刹那、目にも止まらないスピードで加速した驍鬼は、瞬きする間もなく、ペストマスクの目の前まで移動し、手に持った鉋を天高く振り上げる。

しかしそんな窮地でさえ、ペストマスクはその場を動く気配すら見せない。

驍鬼はそんなペストマスクの奇怪な行動に戸惑う事なく、ただ命令された通りに

動く。振り上げた鉈を、今度は力の限り振り下ろした。ブウォンッ！という空気の切れる音が空気を震わせると共に、その刃がベストマスクを捉えた――

ガキイイインッツ!!

はずだった。

「な……ん……だと……!？」

直衛は自分の目と耳を疑った。驍鬼の放った一撃は、確実にペストマスクの脳天を目掛け振り下ろされたはず。本来なら肉の切れる音、骨の絶たれた音、血の飛散する音が夜の闇に響くはずだった。しかし、直衛の耳に届いたのは、そんな生々しい音ではなく、硬い物質同士が衝突した時に生じる甲高い金属音だったからである。

振り下ろされた驍鬼の一撃は、ペストマスクを殺すこと無く、空中で停止した。いや、驍鬼自身が停止させたのでは無く、何かが驍鬼の攻撃を防いだのだ。

そして、直衛はその甲高い金属音と驍鬼の攻撃を防いだモノの正体をその目で目の当たりにしていた。

『コシューー……』

驍鬼の一撃を防いだのは、全身の外皮が漆黒の鎧の様な装甲になっており、顔もフルフェイスのヘルメット様に目、鼻、口が見えない漆黒。更に後頭部からは銀色の獅子の鬘の様な髪が生え、額には、驍鬼と同じように皮膚と同じ色、すなわち漆黒に染まった角が二本生えている細身でスタイリッシュな「鬼」だった。

漆黒の鬼の右手にはこれまた黒い大太刀が握られており、これが驍鬼の鉈を寸前の所で防いだのだ。

『はあ……で？最後の悪足掻きはこれで終わりで良いのか？』

ギリリッ!!チィリリッ!!と、刃同士が互いに強い力で押し合うことで発生する音と夜の闇に美しく光る火花の散る音を、ペストマスク越しに聞きながら、彼は直衛をただただ冷たく見据える。

渾身の抵抗を難なく防がれた直衛は、驚愕のあまり目を見開き口をパクパクさせている。そして、ペストマスクの冷たい視線を肌で感じ、彼は再び自らの死を直感した。

『終わりのようだな。なら…やれ』

ペストマスクの命令を受け、漆黒の鬼は横に倒し驍鬼の鉦を防いでいた大太刀を一度軽く引き、驍鬼がバランスを崩した所で再び力を込め、上方へと弾く。ガキイン!!という鈍い音と火花が散り、驍鬼は上体を仰け反らせてしまう。方や漆黒の鬼は、すぐさま腰を落とし、刀身を外気に晒したまま、居合の構えを取る。そして

——横一閃。

漆黒の鬼が振り抜いた一撃は驍鬼の首を易々と捉え、その首を刎ねた。

驍鬼の首は、人間と同じ赤い血を撒き散らし、月明かりに照らされながら宙を舞う。

首を無くした身体からも勢いよく血が吹き出し、驍鬼の立っていた場所を中心に

血の海が広がる。

驍鬼の身体は後方に倒れ、背中を地面につける。そしてその身体は次第にひび割れ、ボロボロと崩れては灰へと変わっていく。

「う…そ…だろ…」

あまりにも呆気ない驍鬼の敗北に直衛は膝を地面につけ、両肩を落とす。
そして次の瞬間には、直衛の首に冷たい刃が突きつけられていた。

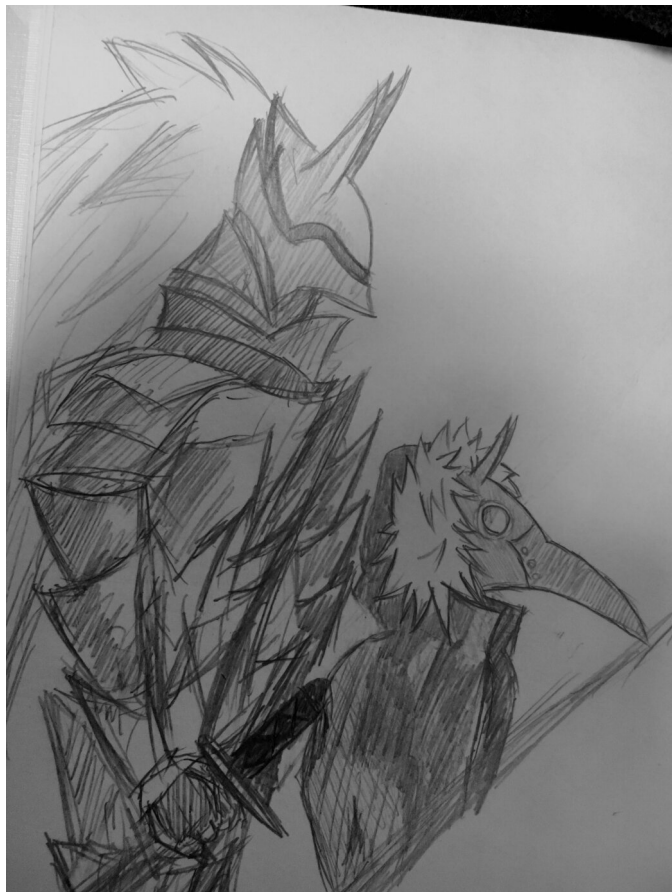
『じゃあな。俺が憎ければ地獄向こうで腕磨いて待ってろ。そう遠くないうちに俺もそっちへ行くだろうからな……』

ペストマスクはそう言い残し、突きつけた刀を振り払った。振り払われた刀は直衛の首の筋肉や骨をたった一太刀で両断した。

奇妙な事に、切られたはずの直衛の首は切られたから数秒間は身体と繋がっており、ペストマスクが鞆に刀を収めると同時に首が地面に落ちた。

彼は自分の足元に転がってきた緋蜂直衛だったモノを、ただただ冷たく見下ろしていた。人を殺した事を嘆いているのか、後悔しているのか、もしくは殺す事に愉悦を感じているのか、そもそも彼にその様な感情があったのかどうか、ペストマスク越しには分からなかった。

しかし、少なくとも痛みも恐怖も一瞬で消し去るペストマスクの殺しの腕は、せめてもの慈悲と言えたのかもしれない。



『任務完了……か』

そう一言溢し、ペストマスクはその着けていたマスクを外し、被っていたフードを下ろした。

今まで隠れていた顔と髪が外気に触れ、夜の冷たい風に吹かれ小さく揺れる。

マスクの中から露わになったのは、血のような赤い瞳とフードを被っていたにもかかわらず、ボサボサと無造作にハネた黒い髪の高校生くらいの青年だった。

「ご苦労だったな」

青年は振り向き、自身の後ろに立っていた漆黒の鬼に労いの言葉をかけると、漆黒の鬼は霧の様に消えてしまった。

「……………はあ、帰るか」

P r r r …!! P r r r …!!

「んっ」

青年がその場を後にしようとした時、胸ポケットに入れていた青年のスマホがブルブルと震え出した。青年はスマホを胸ポケットから取り出し、電話をかけてきた相手を見て、すぐに電話に出る。

「ジャストタイミングだな。今終わったところだ」

『ん…ご当主さま、任務遂行お疲れ様、です』

電車越しに聞こえてきたのは、ゆっくりとした静かな声色の幼げな女の声だった。

「ああ。もうすぐ帰るからアイツにもそう伝えといてくれ」

『わかり、ました。そう伝えて——兄貴ィィ!!』

「うおっ」

電話で話していると突然、話相手の声が怒鳴りつける様な声に変わった。その大声に青年も驚き、キーンとする耳を抑える。突然聞こえてきた怒鳴り声は、先程まで話していた女の声とは正反対のはつらつとした活気のあるこれまた幼げな女の声だった。

『また何にも言わずに任務に行ってたな！いつも言ってるよな！行くなら行くって一言言ってから行けって！何回言わせんだこの駄兄！』

男勝りな口調と迫力で聞こえてくる声は、青年と兄貴と呼んだ。どうやら怒鳴り声の女は青年の妹の様だ。

『月依^{ツクヨ}、ちゃん：電話、返して。それと、ご当主さま、任務の後、疲れる、から、あんまり大きな声、ダメ、だよ』

『でもよー！兄貴は一度言っても聞かねえんだ！聞くまで言うしかねえだろ。ほら、莉月^{リュエ}も言っやってくれよ！』

『え…!? ぼ、ぼくは、別に…』

「はあ… 悪かった悪かった。話は帰ってから聞くから。とりあえず切るぞ」

『あ!! ちよっ、待て兄k——』

活気ある声の女の子を “月依”、静かな声の女の子を “莉月” と呼び合う彼女たち。突然2人で言い合いを始めた彼女達に、兄らしい青年はため息を吐き、任務遂行の報告を終えたと電話切った。

「ったくアイツら… ま、これ以上めんどくさいことにならない様にとっとと帰るか…」

青年はそう言うのと、最後に一度だけ夜空に浮かぶ月を見つめながらある男の言葉を思い出していた。

『お前はあの月みたいに人を暗闇から優しく照らす男になれ。太陽みたいに熱を持つ必要も闇を完全に払う必要も無い。お前は誰かを暗闇から救い導ける男になれ。お前の名前はそう言う願いを込めて付けたんだ』

思い出したのは青年が幼い頃に父親から聞いた名前の由来。それと懸け離れた現

状に、青年は愚痴をこぼす様に吐き捨てる。

「誰かを救い導く… よくもまあこんな環境に産まれた奴にそんな名前をつけたもんだな… 親父のやつ」

月明りだけが降り注ぐ暗闇の中、足元に広がる血の海の上で1人手に持つペストマスクを寂しげに見つめながら佇む青年の名は『カイチ ツキヒコ戒血月彦』。

彼は高校生にして、現代における鬼人が集う組織『鬼掟七家』、その一角を担い、
【掃除】を生業とする『戒血家』の現頭首である。

これは、そんな彼が現代に生きる様々な鬼人達と人の生を喰らう異形の怪物『喰魔』との命を削り合う戦いの物語。

読んでいただきありがとうございます！

1話から1万字近く……長いなーと自分でも思います。すみません、

。

ω

本当に軽く戦闘シーンを描写しましたが、いかがだったでしょうか？やはりかなり難しいですね……もっと分かりやすく迫力のある描写が書けるように努力したいと思います！

それから、早速声と名前だけでしたが、送っていたいたキャラクターのうち2名を登場させました。詳しい説明は次にするとして、まだまだキャラクターは募集しているので（むしろ重要ポジションのキャラが揃っていない）、是非参加いただけるとありがたいです。

月は記憶と共に悪夢を覗く

プロローグを投稿してから徐々にキャラが集まってまいりました。どれも濃くて早く動かしたくなるキャラばかりで、ありがたいです。

それでは早速本編に入らせてもらいます。第2話ですが、今回は戦闘シーンはありません。加えてそこまで話も進みません。すみません(

ω )



「いいか月彦。俺たちは決して私怨で殺しをしてはいけない。それを常に心に入れておくんだ」

そう言って親父は、まだ小さかった俺の心臓に指を当てた。

「私怨って何？お父さん」

「私怨ってのはそうだな……個人的な恨み、つまり自分の為だけに殺しをしてはダメって事だ」

俺の質問に顔をしかめながらも、親父は答えてくれた。その時の俺は多分その言葉の意味を理解してはいなかっただろう。

「自分の為に？」

「そうだ。俺たちは産まれた時から避けることの出来ない残酷な環境に置かれてた。月彦ももう少ししたら人を殺さないといけないかもしれない。俺たちにはそういう力がある」

親父はそう言うのと、酷く悲しそうな表情を見せた。

「そんな環境に産まれたからこそ、お前はそれを誰かを守る為に使うんだ」

「守るため？」

「そうだ。殺す事は本来してはいけない事だ。でも、1番いけないのは殺す事に慣れる事だ。決して痛みを忘れるな。心はいつも正しくあれ。自分のしている事は間違っている、悩み続けるんだ。それはとても辛い事だけど、とても大事な事だ。忘れるな」

親父はそう言ってニッと笑った。いや、顔が笑っただけで心は嘆いていたのかもしれない。その瞳は、今にも涙が溢れそうなほど湿っていた。

「分かった！お父さんの言ったこと、僕、絶対忘れない！」

俺は親父にそんな顔をして欲しくなくて、必死に笑ってそう言った。この頃は、その為の訓練をしていても、殺す事への実感も覚悟も、諸々足りていなかったのだと、俺はのちに後悔する。

「そうか…頼んだぞ！月彦！」

「うん！」

親父は俺の頭に手を置いて、わしゃわしゃと頭を撫でる。随分乱暴な撫で方だったが、俺は親父にそうされる事が好きだった。

すると突然、辺りの景色が一変した。

気がつくと俺は、暗闇の中にポツンと1人で立っていた。

「ここ…どこ？お父さん…？お父さん！」

俺は必死に親父を呼んだ。喉が痛くなっても、俺は呼び続けた。

すると、遙か遠くの方に何か人影の様なものが見えた。目を凝らすと、そこには

こちらに背を向けて歩き続ける人の姿だった。

「っ！お父さん！」

見間違えるはずが無かった。その背中とは、確かに親父のものだった。

「ハア……！ハア……！ハア……！お父さん、待って！！」

真っ黒な空間の中を、視界の先に僅かに移る親父の背中を頼りに追いかける。

「お父さん！お父さん！」

身体はまだ小さい時のまま、小さな手を必死に伸ばしながら走る。何度も呼びかけても、親父はこちらを見向きもせず、ただ淡々と前進するだけ。振り返ることは一度もなかった。

「お父さん！なんで…待って!!」

俺は走り、親父は歩いているのにもかかわらず、その距離は縮まるどころか差が開く一方。

「お父さん！……父さん！……親父!!」

真っ黒な空間をひたすら走っていると、なぜか俺の身体が少しずつ成長を続けていた。10秒経つごとに1つ歳をとり、2分ほど経った頃だろうか。俺の身体は今の、18歳の身体に成長し、そこで成長をピタッと止めた。

「待てよ親父!!親父!-!-!」

成長し、歩幅が大きくなったにもかかわらず、親父との距離は更に開く。親父の

背中が、まるで米粒のように小さくなった時、突然何か俺の首を掴んだ。

「カハッ!？」

首を掴まれた俺は息が出来なくなり、走るスピードを落としてしまう。すると、次々と俺の身体を何かが掴み始めた。手足を掴まれ、身動きが取れなくなる。腰を掴まれ固定され、振りほどく事もできなくなる。頭を掴まれ、地面に押し付けられる。

「な…ん、なに…が…!？」

俺は力を振り絞り、なんとか首を回して後ろを振り返る。そこにいたのは身体の皮膚が血の色に染まり、目がくり抜かれた様に真っ黒な、さながらゾンビの様な人間たちだった。数は、ざっと数えただけでも30人近くはいたと思う。

『お前のせいだ…!!』

『お前が殺した…!!』

『お前が奪った…!!』

『お前が…お、まえが…オマエガアアアア!!』

赤黒い皮膚の人間たちは怨念に支配されたごとく、そう口々に吐きながら、俺の身体にまとわりつき、その赤黒い手で俺を掴んでは、爪を立て皮膚をえぐり、あらゆる方向に力を込めては骨を軋ませる。

「ぐ…がは…!!…っ…!!」

激痛が走りながらも、俺は必死に抵抗し、まとわりつくゾンビ人間たちを弾き飛ばす。しかし、次から次へと湧いて出てくるゾンビ人間たちに、俺は次第に圧倒されていく。

そこで俺は気がついた。この人間とは到底言い難い彼らの顔に、見覚えがあるの

で、一度思いつきぶん殴ってやる。

そう心の中で思っていたはいいものの、どれだけ手を伸ばしても、その手が親父に触れることは無かった。

視界全てが、赤黒いものに覆われていく。

「く、そ……待ちや、がれ……お……や……じ……」

月彦の身体は飲み込まれ、真っ暗な空間の中に、血に染まった右腕の肘から上の部分がポツンと残っていた。

「——ん」

全身をやツらに喰われると同時に、月彦は自分のベッドの上で目を覚ました。

「また……あの夢か……」

地獄のような悪夢から目を覚まし、上体を起こした月彦。しかし、彼はそんな悪夢を見ても、汗をかいたり、息を切らしたりする事はなく、まるでそれが日常に起こる出来事のように落ち着いた様子だった。

ピピッ!!ピピッ!!ピピーーーー!!

「…ん」

月彦が目覚めてから数秒後、枕元に置いてあった充電ケーブルに繋がれた月彦のスマホからアラームが鳴り出した。時刻を確認すると、現在は午前7時。時刻を確認し、ベットから出た月彦は、スマホをもって部屋を出る。すると、そこには目の前には広々とした庭園が広がっており、縁側の様な廊下が左右に続いていた。

「ふあゝ…眠…」

大きなあくびをしながら長い廊下を歩く月彦。次第にジュ〜っという何かを焼いている様な音と、香ばしいにおいが聴覚と嗅覚を刺激する。月彦はその音と匂いが流れてくる部屋まで来ると、障子を開け中に入る。

「あ、月兄い。おはよう、ございます……」

そう言って彼に声をかけたのは、黒いリボンで結んだ空色のツインテールに、見つめると吸い込まれそうになる闇色の瞳をした小さな女の子だった。その子はベージュのセーラー服に焦げ茶色のチェックのスカートを履いており、その首には、黒いリボンの形をした首輪を着けている。手にはお盆を持っており、その上には小鉢に入ったきんぴらごぼうや漬物が積まれている。

「ああ、おはよう莉月^{リュエ}」

月彦は少女を「莉月」と呼び、まだ完全に覚めてない目を擦りながら挨拶を返す。彼女の名は『戒血^{カイチ}莉月^{リュエ}』。昨晚月彦に電話をかけてきた静かな声色の少女だった。電話では月彦の事を『ご当主さま』と呼んでいた彼女だが、今は『月兄い』と呼んだ。呼び方的に兄妹のようだが、2人はお世辞にも似ているとは言えない顔立ちだった。

「あ！やっと起きたか兄貴！ちやっちやと顔洗つて着替えて来い！ご飯もう出来てるから、冷めても知らねえぞ！」

すると、部屋の奥の台所から男勝りな声でそんな言葉が聞こえてくる。月彦が声のした方に顔を向けると、そこにはトントンと手慣れた手つきでリズムカルに包丁を使い料理をしている少女がいた。

莉月と色違いの黒のセーラー服と黒のチェックのスカートの上に白のエプロンをつけた少女。短く切られた艶やかな黒髪が外に跳ね、瞳が血に濡れた様に赤い少女は、髪と瞳の色、そして纏う雰囲気がどこことなく月彦に似ている彼女の名は『戒血^{カイチ}月依^{ツクヨ}』。

月彦、月依、莉月、この3人がこの戒血家の宗家に住み、戒血を統括する現当主とその家族である。

「分かった分かった」

月彦はつの言葉を軽く流す様に返すと、部屋を出て洗面台のある風呂場に向けて歩いて行った。

風呂場に着いた月彦は、まず歯を磨く。それを終わると、手に水をつけ、ボサボサに跳ねた髪に濡れた手を当てて跳ねた髪を整える。ある程度の跳ねは治ったものの、元々癖っ毛に近いボサボサの髪はそこまで治った様には見えない。

「はあ…」

諦めた様にため息を吐いた月彦。頭から話した両手を、一度じっくり眺める様に目の前に持ってくる。すると突然、彼はもう一度蛇口をひねり水を出すと、両手を擦り合わせながら手を洗い始めた。

の顔に特に表情は無く、いつもの遣る瀬無い様な表情のままだった。

キュッと蛇口をきつく閉めた月彦は、タオルで手を拭いてから台所のある部屋へと戻っていった。

部屋に戻った月彦、すでに机の上には漬物やきんぴらごぼう、鰯の幽庵焼きといった豪勢かつバランスの取れた朝ごはんが並んでいた。が、不思議なことに、机の上に箸は三善置かれているのにも関わらず、それぞれのおかずは2人分ずつしか無かった。更に何も置かれていない机の一角の所に置かれているのは、いつも月彦が使っている箸だった。

「あー… 莉月？これはつまり…」

「え、えと… 月兄いの分は、別に… 作るからって… 月依ちゃんが」

てっきり昨日の電話ブチ切りに怒った月依が“朝ご飯無し”という挙行に及んだ

のかと思った月彦だったが、どうやら月依は月彦の朝ご飯を別で用意しているらしいと莉月から聞き、一安心する月彦。ほっと一息吐いてから椅子に座る。

「おまたせ兄貴」

月彦が椅子に座ってすぐ、台所からこちらに來た月依が手に持った皿を月彦の前にドンツと置いた。

「・・・え?」

月彦の目の前に置かれたのは、かなりの大きさのどんぶりに高々に盛られたカツ丼だった。白く艶やかに輝く米がどんぶりの高さの倍くらい位置まで盛られ、その上にカラッとキツネ色に上がったカツと黄金色に輝く卵と玉ねぎがご飯の上に乘せられている。カツから出た肉汁と旨味の溶け込んだツユが米にかかり、煌びやかな輝きを放っている。本来なら、これほど食欲をそそるものは無いだろう。そう、

本・来・な・ら・…

「えーっと… 月依さん？これは…」

月彦は「嘘だろ…？」とでも言いたげな表情のままこのカツ丼を作った本人である月依に問う。

「兄貴の朝飯だけど？」

対する月依は「当たり前だろ？何言ってるんだこの駄兄」と完全に言っている表情で返す。

「朝からカツ丼ですか…？しかも量がアスリートの量なんだが…」

「んー？どうやら兄貴は人の言うことを全く聞かないらしいからな。昨日も任務から帰ってきたと思ったら説明も無しに風呂入ってすぐ部屋に戻ったから、私はきつ

と兄貴がお腹を空かせてるんだろなーと思って朝からこうやってカツ丼を用意した訳だけど？」

「お前…昨日のこと根に持ってるだろ」

「まっさかー。私は兄貴の事を思ってたただけけど？」

「どこに兄を思って朝から特盛のカツ丼を食わす妹がいるんだよ…」

「文句あるなら食べなくてもいいぞ。ついでに弁当も無しだけどな」

「鬼か、お前は」

「一部はそうだぜ？」

「ふ、2人とも…早く、食べないと…学校、遅れる…よ？」

莉月に止められ、ため息を吐きながら仕方ないかと特盛のカツ丼を食べ始める月彦。朝から胃にガツンとくる肉と米に、恨みを込めた視線を送りながら、なんとか流し込む。

案の定、今日一日グロッキー状態が続いたのは、彼の自業自得だろう。

※追記解説（ここでは、本編に載せられなかったちよつとした内容の解説をさせていただきます）

・月彦たちが住んでいるのは、戒血家の宗家でかなりの大きさの屋敷ですが、住んでいるのは現在月彦、月依、莉月の3人のみです。他の家にはメイドの様な世話係の様な人（戦場に赴かない鬼人が基本的になる）がいるところもありますが、月彦たちはそういう人達を屋敷には置いていません。

悪夢に沈む月は微かな音に手を引かれる

超絶お久しぶりです。

ここしばらく私用とモチベーションの低下により更新を行えておりませんでした。気づけば年も明け、2020年に突入しました。またボチボチとではありますが、小説を投稿していこうと思います。

遅ればせながら、あけましておめでとうございます。今年も夜十喰をよろしくお願ひします。

「オエ……まだ気持ち悪い……」

朝から特盛カツ丼という中々の試練をなんとか切り抜けた月彦。案の定、普通な

らありえない朝の満腹感と襲い来る胃もたれにすでにグロッキー状態となっていた。普段から血や死体に触れている月彦だが、こればかりはどうにもならないらしい。なんとか通う高校に着いたは良いものの、授業を受ける気にはなれず、彼は屋上で持ってきた鞆を枕に仰向けに寝そべり顔を真っ青にしていた。

「ま、自業自得か……あいつらにはまだ【掃除】をしてもらう訳には行かないし。頑張れ、俺の胃袋……まだまだ重朝飯からは解放されなさそうだぞ……」

【掃除】というのは、月彦が当主を務める『鬼掟七家』の1つ、『戒血』の稼業の事で、内容は“掟を破った鬼人の抹殺”。情報の漏洩はもちろん、一般人に対して力の行使したり、むやみに深い関係を持つ者もこれに当たる。これが彼に与えられた使命、代々戒血家当主が全うしてきた責務である。

「ふぁーあ……それにしても、ここしばらく任務が多いな……」

大きな欠伸をしながらそう愚痴をこぼす月彦。彼の言うように、彼が戒血としての任務を行うのはここ1ヶ月で既に3人目となっているのだ。加えてまだ詳しい調査を行なっている件も複数存在している。

任務が多いと言う事は、数いる鬼人の中からその自覚や責任を忘れている者たちがいると言う事と同義。月彦はそんな状況になりつつある現状に、一当主として頭を捻らせる。

「ここ数年で喰魔の出現率とその戦闘力が増してきているし、被害に関しても日々対策が練られてるとはいえ、民間人の被害が無くなって無い。主力の『淵上』、『緋蜂』、俺たち『戒血』の三家の中から戦闘に自信のある奴らは出来るだけ各地に散らばるようにはしてるが、それだけじゃ民間人への被害抑えるのはやっぱり厳しい。特に『淵上』の連中に任せると最悪喰魔以上に被害が出るかもしれねえし…はあ、考えるだけでもめんどくせえ…寝るか…」

柄にも無く考えてみたが、結果これという打開案は見つからなかった。月彦は

早々に考えるのを止め、気持ち悪さを紛らわせようと腕を枕にしてゆっくりとまぶたを閉じる。その時校舎には朝のチャイムが鳴り響いた。

そんなことお構いなしに、月彦の意識はゆっくりと遠退いていく。次第にチャイムの音は小さくなり、閉じたまぶたを照らしていた日の光はその光を失うように消えて行った。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

(・・・ん、ここは——)

気がつくと、月彦は見知らぬ場所に茫然と立ち尽くしていた。辺りを見渡すがそ

ここには一面深い闇が広がるばかりで何もない。

(何処だここ……)

——ビチャッ!!

月彦が歩き出そうと足を一步前に出した時だった。不意にそんな不快な音が足元から聞こえてきた。顔を歪ませる月彦。彼は既視感のあるその音に歪ませた顔を保ったまま、彼は音が聞こえたのと同時に突如重みを感じ始めた右手へと視線を向けようとゆっくりと顔を動かし始める。

ピト…ピト…ピト…

すると、今度は水滴が落ちる様な音が暗闇に響いては消えて行くのが分かった。

ピト……ピト！………ピト≡

視線が右手に近づくにつれ、水滴の音はその間隔を広げて行くが音はより鮮明に耳へと届く様になってくる。

ようやく視線が右手に辿り着く。すると手に黒い刀の柄の部分が握られているのが見えた。視覚で刀を握っているのを認識してようやく、月彦の手には刀を握る感触、刀の重みが伝わる。

今度は視線を柄から前、刀身へと移して行く。刃は良く砥がれており、ギラリと銀色に輝いている。

しかし、その美しい銀色は地面に向いた切っ先に近づくにつれ、赤黒い液体に濡れて汚れてしまっていた。その赤黒い液体は刀身を流れ、滴り地面へ落ちる。

ようやく視線が足元へ向くと、そこには大きな赤黒い水溜りが出来ており、月彦

はその中心に立っていた。そんな異様な光景の中で、月彦は「やっぱりか……」と小さく呟き、足元に大きく広がる赤黒い液体に視線を落とす。鼻につくこの鉄の様な匂い、それは彼がこれまで何度も嗅ぎ、浴び、触れ、染まってきたもの。それもおそらく動物や魚の物ではない、獣臭さも生臭さも無いこの液体は間違いない。

人間の血液だ……—

(……………)

気づけば先ほどまで刀に滴っていた血は流れるのを止め、暗闇の中で赤く映える血溜まりは揺れることなく見下ろす月彦をまるで鏡の如く映し出していた。まるで自分自身を踏みつけている様に、真下に映る自分の姿にじっと視線を送る月彦。しかし、血溜まりに映る月彦は見下ろす彼とは違う姿でそこには映っていた。

血溜まりに映る月彦の身体は血でびっしりと汚れ、衣服はボロボロ、顔や破れた衣服の隙間からは生めかしい傷が顔を覗かせ、その瞳はまるで闇に何度も漬け込んだの様に暗く、光を全く映していなかった。

そのことに月彦は動揺の一つさえも見せない。姿の違う自分自身に視線が吸い寄せられる様に彼はただ茫然と見下ろす。

（ああ… やっぱり俺はどう足掻いてもあの頃の俺からは逃げられねえみたいだな…）

彼は暗闇に小さくそう零すと、刀を持つ手とは反対の左手を血溜まりに映る自分に差し出す様に伸ばし始めた。当然、血溜まりに映る月彦も同じ様に手を伸ばし、月彦の瞳は次第にその瞳を血溜まりに映る月彦と同じような光の無い瞳へと変化させていった。

ゆっくりと2人の月彦の手が合わさろうとした正にその時だった

『……ジー………ジー………ぱ……い………』

突然頭の中にノイズが響き渡る。ノイズの遮りにより、血溜まりに映る自分に伸ばされていた月彦の手が止まる。月彦は無意識のうちにノイズに意識を集中させていた。すると微かだが何かが聴こえる。ほんの微かだが、それは間違いなくノイズとは別のもの。今度は意識してノイズに耳を傾ける。

『………ジー………ん………ぱ……い………』

やはり微かだが確実に聴こえる。これは“声”だろうか、途切れ途切れだがそれは間違いなく人の声だと月彦は理解する。やがてその声はノイズを掻き分け、ハッキリと月彦の鼓膜を揺らした。

『……せん……ぱ……い……せん、ぱ……い……』

“せんぱい”、未だ途切れ途切れだか、その声は確実にそう言葉を連ねていた。次第に声は色を持ち、月彦は声の高さから声の主は女性であると理解する。

(……………)

声の主が女性であると月彦が理解した途端、月彦がいる暗闇から微かな光が極小の隙間から漏れ出した。月彦は血溜まりに伸ばしていた手を引き、何か言葉を発する訳でもなく、ただ導かれる様にその小さな光へと手を伸ばす。手が光に重なった瞬間、突然光がその輝きを強める。その光は次第に暗闇を払い、光を失いかけた月彦の瞳に再び光を灯す。

『……せん、ぱい………先輩!!』

今度は途切れも無くハッキリと聴こえた「先輩」という声。その声は暗闇を染めた光の中で、伸ばされた月彦の手を掴み、光の輝く方へと強く引き寄せた。

・

・

・

・

「……………空」

目を開けて飛び込んで来たのは、青と白に彩られた鮮やかな空模様だった。同時に背中や尻からは硬い感触を感じる。月彦は自分の記憶を辿り、自分が学校に来て早々サボりをきめて屋上で眠っていたのを思い出した。月彦は「しまった…」とかなり深く寝ていた事を少し後悔しながら、今の時刻を確認しようと上体を起こしス

マホの時計を確認しようとした時だった。

「やっと起きましたか。随分と優雅に眠っていましたね、先輩？」

時刻を確認する間もなく、隣から呼びかけられる。月彦は声の主へ視線を送る事なく、顔を少しバツの悪そうな表情へと変える。次の瞬間、月彦は高速で起き上がり、その場から退散しようと脚に力を込める。

「どこに行こうとしてるんですか？まだ話は終わっていませんよ？」

が、それは無駄な抵抗だと思い知らされた。月彦が起き上がった瞬間、声の主は月彦との距離を詰め、彼の肩に手を置き動きを固定する。月彦と声の主との距離はわずか3、4歩程度だったが、月彦は相手が一般人の生徒なら逃げ切るには十分すぎる距離だと思っていたが、生憎とその相手は俗に言う一般には含まれない生徒だった。

「…………そろそろ授業が始まる頃だから戻ろうかなーと」

「始まるどころかもう既に昼休みですよ？」

「……………そういや先生にプリント配ってけって頼まれてたんだ」

「朝から教室に居なかったくせにいつ先生に頼まれたんですか？」

「……………あ、そうそう。今日昼一緒に食べようって言わー——」

「先輩友達いませんかよね？」

「ハイ。申し訳ございませんでした」

完全に逃げ場を失った月彦はいとも簡単に自らの敗北を認めた。我ながら相手を間違えたと後悔しながら肩を押さえつけている人物を見上げる月彦。

そこにいたのはその名の通り宝石と同じ色をした琥珀色の瞳に黒縁の眼鏡をかけた、艶やかで鮮やかなストレートの長髪を風に靡かせた美少女と言って間違いようが無い顔立ちをした女生徒がこれでもかという清々しく恐ろしい笑顔で月彦の肩に手を置きながら腰を曲げて立っていた。靡く女生徒の髪は時々地面と並行になりな

がら風に吹かれていた。その髪色は焦げ茶色という表現が一番正しいだろう。焦げ茶色の髪は日の光を反射しキラキラと輝いている。しかし反射した光は毛先に近づくにつれ次第にその輝きを強めていた。それはなぜか、それは彼女の太ももの辺りまでであるであろう髪の色が腰と背中のように中間辺りから徐々にその色素を無くしていき、腰を超えた辺りから完全な純白に変わっているからである。

「全く先輩は……もう少し真面目に学生という立場でその本分を全うされてはどうですか？」

「授業をサボることも学生の本分だろ」

「そんな本分ありませんよ！以前も言いましたよね！貴方は事情はどうあれ当主なんですから、ピシッとすべきところはそうするべきですよ！」

「当主だから真面目に生きるべきってのは固定概念に囚われすぎじゃないか？」

「当主とは家の代表なんですから、まずその代表がしっかりしてないと部下の方々に示が付きません」

「ならその代表の1人である俺にそんな口の利き方で良いのか？」

「当主といっても先輩ですから。私も敬う相手は自分で選びます」

「そうですかい……」

これはいくら口論を交わしても勝ち目がないと判断した月彦は早々にこの無駄な論争から手を引いた。月彦が白旗を上げると、その女生徒はスカートを整えて月彦の隣にすっと正座で腰を落とした。

「それで？ わざわざのこの素行不良生徒の俺に注意しに来たのか？ ソナタ」

「ええ。先輩の様な駄目当主には私のようなお目付役が必要ですから」

「おっふ……そーですね」

月彦が口にした“ソナタ”という名。これが彼女の名である。“叶ソナタ”、彼女も月彦と同じ鬼掟七家の1つ『叶家』に在する鬼人の1人である。『戒血家』と『叶家』、家元は違えど共に喰魔との死闘に身を投じる者同士、特に【治療】を稼業とする叶家はいわばゲームというヒーラーの役目を担う戦闘において重要な役割を

持つ家系。叶家の力無くしては喰魔討伐の難易度は何倍にも跳ね上がる。

「まあ理由はそれだけでは無いですが」

「？なんだよ」

「人に物を頼むときは？」

「……教えて下さい」

「はい、よく出来ました」

「お前……」

この2人の口論は今に始まった事では無いのだが、結果はいつも決まっている。月彦が身を引いてのソナタの勝利。これが2人の口論のお馴染みの結末である。屁理屈など吐こうと思えば湯水の如く湧いてくる月彦ではあるが、彼は彼女、ソナタにだけは強く当たれない。もちろん、それは彼女の押しの強さと物怖じしない性格ゆえにでもあるが、1番の理由はそれでは無い。

屁理屈を返す月彦に対し、ソナタは袖をまくって徐に右腕を見せつける。その右腕には少なくとも前腕からまくられた袖から顔を出している上腕部分までギッチリ

と包帯が巻かれていた。

「卑怯だろ……それは」

「あら？『卑怯、汚いは敗者の戯言』が先輩の座右の銘じゃなかったでしたか？」

ソナタは肩を縮める月彦にニヤッと笑うと、まくった袖を元に戻した。そう、この包帯が月彦がソナタに強く出れない最も大きな要因である。この包帯の下には、数年前に月彦がつけた大きな傷が残っているらしい。稼業が【治療】である叶家にかかれば傷など綺麗に消す事は容易なのだが、ソナタはあえて消さずに今回のように月彦に対する脅しとして活用しているのだ。

「お前、ここ数年で性格歪み始めてねえか……？」

「それはもちろん、性格も根性も性根も歪みに歪みまくってるでしょうも無い歳上の男の人と一緒にいる事が多かったですからね」

「はあ……」

「あら、ため息なんて失礼ですね。ふふ、まあお遊びはこの辺りにしておきましようか」

どこまでも自分を追い込んでいくソナタに深くため息を吐く事で反応を返す月彦。しかし、そのセリフを最後に、先程まで煽る様な笑みを浮かべていたソナタの顔から突然笑みは消え、その表情は真剣な面持ちとなって月彦を強く見つめた。

「月依ちゃんに聞きました。昨晚も任務があつたそうですね」

ソナタの言う任務が指すのは考えるまでもなく月彦の稼業掃除に関する事だと月彦は理解する。彼女にそう切り出された月彦は特に顔色の変化も少しも反応する様子も見せず、ただ単にめんどくさいなと言った感じでそれはそれは深いため息を吐いた。

「はあゝゝ…またあいつか。いちいち報告するんじゃないよ」

「そんな風に言っただけであげないで下さい。それだけ先輩を心配してるって事ですよ」

「まさか、ただ任務に連れて行って貰えないからその腹いせだろう」

「もう、またそんな風に考えを捻くれさせないで下さい」

そこから少しの沈黙が2人の間に流れた。月彦はこれ以上踏み込んで来て欲しくなさそうにソナタと視線を合わせず、対するソナタは一向に自分と視線を合わせようとしないう彦を心配するように視線を逸らす事なく見つめ続ける。

「……大丈夫ですか？」

沈黙を破ったのはソナタのその一言だった。なんの飾りもなく、シンプルに投げかけられた問いに対し、月彦はソナタに背を向けたまま立ち上がった。月彦のその行動に、言葉を間違えたと思ったソナタは、背中を丸め、顔を伏せ、太ももの上に置いた両拳を強く握りしめた。彼が他人からの干渉を好まない性格なのは理解していた。だから彼はいつも必要な事しか他人に話さないし、必要が無いと判断した事はめんどくさいと他人に話す事はない。それはソナタ自身も良く分かっていた。で

も、そう言葉をかけずにはいらなかったのだ。いつも彼を見ていたソナタだったから。彼の抱える闇も光もどちらも知ってるソナタだったから。彼が誰よりも無理を重ねた結果を見に染みて知ってるソナタだったから。さっきもそうだ、さっき月彦は寝ている間にすぐそばまで近づいて来ていたソナタに気づかなかった。普段の彼であればいくら寝ているとはいえ、その隙に近づく気配を察知出来ないはずがないと知っていたから。

すると突然、下がった頭に何かが触れる感触がソナタに伝わった。その感触は頭全体を包んでいるかの様にとっても大きく、そして何より、その感触には確かな温かみがあった。

「え……」

あまりに唐突な事に反射的に顔を上げるソナタ。上げた先には、自分に向かって手を伸ばしている月彦の姿がすぐ近くにあった。そこでようやくソナタは自分の頭

に月彦の手が触れられている事に気がついた。撫でると形容されるであろう行動を起こす月彦の表情は、かなりぎこちない微笑みと共にソナタに安心を与えようとしている事が理解できた。

「あー、なんだ……そのー、えーっと……まあアレだ。心配しなくていい、俺は大丈夫。悪夢もちゃんと見れてるしな。まあこう言う心配させちゃうかもだけど、大丈夫だ」

悪夢を見ると言う事は自分の中に罪悪感が存在し、それが無意識のうち、寝ている間に脳がそれを定着させようとしている事だと月彦は自分なりに解釈していた。昔、自身の父親に言われた『1番いけない事は殺す事に慣れる事だ』、この言葉は現在の月彦を構成する言葉の中でも特に重要なもので、つまりは悪夢を見る＝殺す事に罪悪感を持っている、という事の証明であるから。

過去に月彦はこの言葉を忘れた事があった。度重なる不幸、窮地、厄災に見舞われ、当時まだ中学生だった月彦の心は闇に埋もれてしまった。そんな彼を救ったの

が、今現在彼の目の前にいるソナタなのだ。だから彼は、恩人である彼女に悲しみや後悔を抱いて欲しく無いと、慣れない手つきで彼女の頭に手を伸ばしゆっくりと撫で始めた。ではなぜ起こした行動が頭を撫でる事だったのか、それは月彦自身も理解していなかった。ただ何となく、反射的に起こした結果こうなっただけ。別段理由があつた訳ではなかった。

「・・・・・・・・」

撫でる者と撫でられる者、そんな2人の間になんとも言えない沈黙が流れる。月彦は1度開始してしまつたため、どうにも自分から手を引くのは忍びないと躊躇して動けない状態におり、対するソナタは不意に向けられた月彦の優しさときちなくも温かな微笑みを受け、恥ずかしさのあまり言葉が出ず、同じく動けない状態になつていた。

そこから何分、何十分ほど経つただろうか、いやもしかしたら60秒も経ってい

ないのかもしれない。2人には経過する時間を気にしていられる余裕は無く、無言のまま、ただただゆっくりと時間だけが過ぎていった。

しかし、そんな2人の沈黙は月彦のポケットから発生した電子音によって破られる。

P r r r r … !! P r r r r … !!

「うおっ!？」

「きゃっ!？」

ポケットを震わせる振動と高い電子音に声を上げて驚く2人。月彦はソナタの頭の上に乗せていた手を反射的に離し、すぐに立ち上がってポケットに入れていたスマホを取り出した。

ソナタに背を向けて少しだけ距離をとり、画面に映った相手の名前を確認してか

ら通話ボタンを押す月彦。そんな月彦の背中をソナタはどこか名残惜しそうに見つめていたが、月彦がその視線に気づくことは無かった。

「莉月か、なんだ？」

通話をかけて来たのは昨夜同様、妹の莉月だった。莉月は慣れた口調で月彦に迅速に報告を行う。

ちなみに莉月が今月彦に通話をかけて来ているのは彼らの住む戒血家の宗家から。本来は莉月も学校に通う歳なのだが、彼女はとある理由により学校には通っていない。故に喰魔出現の情報をいち早く入手し、瞬時に月彦へと報告できるようになっている。

『ご報告です……ご当主さま。現在、ご当主さまのいる地点より北東へ約4里の地点に喰魔が出現、しました』

「……すぐ向かう。結果は？」

『既に発動済み、です。民間人への被害も、今のところ、確認されていません。近くにいた他の家の鬼人も数名、既に現場に向かっています』

莉月の言う結界とは、七家の1つ【防衛】を稼業とする『蜜芭家』が開発した人の五感による認識を断つ効果のある結界の事で、結界が発動している範囲にいる鬼人及び喰魔は民間人から認識されなくなるのだ。

「分かった。逐一状況の報告を頼む」

『了解、しました』

そこで一度通信を切った月彦は、制服の上着を脱ぐと、屋上の床に置いてあった鞆に手を入れ、なかからあるものを取り出した。それは真っ黒に染まったモッズコート、そして2本の角が生えた不気味なペストマスクだった。

「先輩、喰魔の出現ですか？」

「ああ」

月彦の行動を見て通話の内容を理解したソナタ。自分も急いで出勤の準備をしようと持ってきて来ていた鞆に手をかけるが、月彦に呼びかけられてしまう。

「おい、ソナタ」

「はい、なんですか——って、おっと!？」

名前を呼ばれ月彦の方へ向いた瞬間、ソナタの目には月彦がこちらに向かって何かを投げて来ているのが映った。咄嗟にその何かをキャッチしたソナタは、自分の腕に収まった物を確認すると、それが月彦の鞆だという事が分かった。

「お前はここに待機。後それ預かったといってくれ」

「え!? 私も行きますよ!」

「ここから現場までの距離なら俺1人の方が速い」

月彦はそう結論だけ言い捨てると、脚に力を込めて跳躍。軽々と屋上を囲っていた3mほどの高さのフェンスの上に着地し、先程鞆から取り出したモッズコートを見に纏う。更に手に持ったペストマスクを付け、右耳の辺りを少しいじる様な動作をしたのち、そのままフェンスを足場に助走をしながら現場の方角である北東にあった建物の屋根へと再び跳躍した。

「ちょっと先輩!!……もう！またそうやって」

そう愚痴をこぼしている間にも、月彦は次々と建物の屋根や屋上を伝って一直線に現場に向かっていった。その姿はまるで物語の中の忍者の様に軽やかで素早く、あつという間にその姿は小さくなっていった。

対して1人屋上に残されたソナタは、月彦の制服の上着と鞆を抱きしめていた両腕に、ギュッと更に力を込めた。そんな彼女の表情は、置いていかれた切なさや

怒りを孕みながらも、懸念の色が濃く現れていた。

「月彦先輩……」

ソナタは小さく自身の脳内を埋め尽くす人物の名前を口ずさみながら、真っ直ぐと彼が消えていった先を見据えていた。

キーンカーンカーンコーン！！！！

その時、授業の始まりと月彦の闘いの始まりを告げるチャイムが、学校中に響き渡った。

※追加解説

・月彦達が通う学校は“私立大江杜（おおえもり）高校”と言う学校です。偏差値

は63と平均より高めで、生徒の自発性を尊重する学校となっております。周りには住宅地や商店街の他に、廃工場や空き地が広がる開拓予定地、少し離れたところに山があったりします。

大江杜高校には月彦とソナタの他にも鬼人は何人か在籍しています。基本的に1つの学校に鬼人は3人〜5人ほど在籍しており、戦闘時のバランスを考えて七家から各1人ずつ通わせるのが基本となっています。

鴉、戦下に立つ

4 話目です。

お待たせしました。今回は初めての喰魔との戦闘…と行きたかったのですが、戦闘に入る前までにしました。募集いただいたキャラも1名ですが登場します。それ以外にもキャラは登場しますが名無しのモブキャラです。

皆様のキャラの登場は一斉ではなく少しずつ登場させたいと思っています（まあ一斉登場させる必要のある話も少ししたらでてくるのですが…）。各々自キャラの登場は気長に待っていただければと思います。

またかなり多くのキャラをいただいた為、一人一人を深く掘り下げるのは自分の力量とキャラ設定の噛み合わせ辛さなどから厳しいと判断しましたので、キャラによつては軽く登場する程度になってしまう場合があります。

自分の未熟さゆえに申し訳無いのですが、この小説を続けていく為にもご了承いただけるとありがたいです。

いきなりこの様な報告になってしまいすみません。それでは本編をどうぞご覧ください。

莉月からの連絡を受けてすぐ学校を後にした月彦。彼は現在屋根や屋上を足場に、風を切る速さで現場へと向かっている。

月彦は移動しながら右耳の辺りをいじると、ペストマスクに搭載された耳元の通信機の電源が入れられ、手を使わずに通信を行える状態となった。

「目標まで残り300m。莉月、状況に変化は？」

月彦は建物と建物との間を軽々と超えながら、通信相手である莉月に現場の状況を尋ねる。

『はい：現在、現場には辻風家の鬼人が2名、それから：兎宮家の鬼人も1名、現

場に到着したもよう、です』

「チッ、支援組ばっかだな」

『それと…喰魔の出現したポイント、は現在立ち入り禁止区域になっている工場跡地、だった様なので、民間人への被害は無い、そうです。先程の3名の鬼人、が戦闘を行なっています。が、苦戦中、とのことですよ』

「…分かった。もし現場と通信が取れたらもう少し粘れと伝えろ」

『承知、いたしました』

莉月の正確かつ事細かな状況説明を受け、月彦は急ぐ足を更に速める。いくら工場跡地とはいえ、その周囲には幾つもの民家が建ち並んでいる。しかも現在現場には戦闘に向いた鬼人は居ないと考えるのが妥当であった為だ。

鬼人は本来団体での戦闘を行うのが基本となっている。それは7つある家がそ

れぞれの役割を持っているが為であり、鬼の力もその役割になぞられたモノが多く存在しているからである。故に鬼人たちは、各々が自分に与えられた役割をしつかりと認識しそれを真っ当に担ってさえいれば、隙の無い戦闘が行えるのである。しかしこれは裏を返せば、どれかが欠けた場合、一気に脆く砕けてしまうとも言えた。もちろん、この定義の枠に当てはまらない者たちもいるのだが……

それはさておき、上記の理由から月彦は現在、現場の状況は曲がりにも優勢とは言えない状態であろうと予測したのである。

「……っ、見えた。あそこか」

月彦の視線の奥には倒壊した工場跡地から上がる土煙が見え、更に微かではあるが、身体に響くような轟音も感じ取れた。

遠目から激しい戦闘が行われているであろう現場を目視した月彦は更に加速した。

月彦現場到着まで——およそ700m

ドオゴゴオオオオオオオオ！！！！

空気を震わす怒号が周囲に響き渡り、密度の濃い土埃が地面から巻き上げられる。崩れた岩やコンクリート片が地面に落ち、パラパラと音を立てる。

「あー・・・ただでさえ喰魔退治ってだけでめんどくさいのに、なんでこんなヤバイのと当たるかねえ・・・」

土埃の中からそんな愚痴が聞こえる。やがて土埃がはれると、中には人影が見えた。人影は地面につけていた腰を徐に重そうに持ち上げると、ゆったりと立ち上がった。

その人物は黒い髪を乱雑に伸ばし、くすんだような黒い瞳の上にメガネをかけた細身の中年の男だった。男の右耳にはインカムが装着されており、身体には薄くだが傷が付いている。

中年男は髪にかかった土埃を手で払い落とすと、今度は着ていた少しくたびれた茶色のロングコートについた土埃を同じように手で払った。

「郷さん！無事ですか!？」

すると、人影とは別の場所から若い男の慌てた声が響く。若い男は中年男を『郷

さん』と呼び、彼のいる場所まで駆けて行った。若い男の手には1本の刀が握られており、その身体には至る所に傷があった。特に刀を握る右腕からは大量のちやうどが流れていて、男はその刀を握った腕とは反対側の手で傷口を強く抑えていた。

「まあなんとかな、そっちは？見たところ無事ではなさそうだけどな」

「笑ってる場合ですか、この状況で……」

なんとも人ごとの様に軽笑する郷に対し、若い男は目を細めて呆れているかのよう
うに言い返し、状況の報告に移る。

「正直かなり不味いです。ジブンともう1人、兎宮の鬼人の鬼は受けたダメージ
が大きく一度消滅、再顕現にはまだしばらくかかりそうです。しかもジブンはこの
通り腕をやられてしまいました。兎宮の方もジブンと同等程度の傷は負ってるはず
です」

「まあ元々俺たち辻風も兎宮んともほとんどの鬼人が戦闘向きじゃあ無いからな。仕方ないと言えはそれまでだが……カァー！せめて叶の奴らがいてくれれば時間稼ぎくらいは出来たのによぉ！」

どうやら若い男も郷と同じ辻風家の鬼人の様だ。そんな男の報告を聞くまでも無く、現状は最悪の状況下にあった。今まともに動けるのは郷のみ。その郷も、現状を逆転出来るほどの打・開・力・は持ち合わせていないのだ。

郷たちが苦悩していると、ゴゴゴゴゴ!!という大きな音を立てながら、地面が大きく揺れ始める。

「そおれ、また来たぞ！」

その揺れを体感して直ぐ、郷たちは戦闘態勢をとった。既にこの後何が起こるのか、2人には分かっているようで、2人は徐に今自分たちが踏み締めている地面

に意識を集中させた。

「・・・・・・・・」

すると突然、先程の音と揺れは収まり辺りに静寂が訪れる。辺りは緊張に包まれ、郷たちはより一層地面へ意識を向ける。

次の瞬間――

ギュラアアアアアアアアア！！！

この世のモノとは思えない咆哮と共に、2人の立っていた地面に亀裂が入り、それに気づいた瞬間にはそこから何かが飛び出した。

「……………」

2人は慌ててその場を飛び退くが、突然地面から飛び出した何かによって郷は左脚を、男は負傷していた腕に再度傷を負うこととなった。更にその衝撃で男は持っていた刀を手放してしまい、刀は少し離れたところに飛ばされてしまった。

郷の左脚、そして男の腕からは血が滴り落ちる。2人の傷はどちらも刃物で斬りつけられた用に裂かれているが、幸いどちらも軽傷と言えた。それは何故か、それは、2人の手脚に傷をつけたエモノが、本来ならば2人の手脚を身体から切断してもなんらおかしく無かったほどの大きさを誇るモノだったからである。

「クソつたれ!!」

「ぐっ:!!」

2人は痛みに耐えながら、言葉を発するより前に天を見上げる。

ギユラガアアアアアアアアア!!!

その視線の先に現れたのは、地面からその巨体を露わにした骨白色の節に分かれたムカデのような化け物だった。その節の一つ一つからは鋭利な三角錐の形をした脚が2本ずつ生え、頭部には不気味に赤黒く輝く左右それぞれに3つずつ計6つの目と涎の様な体液を纏った鋭い牙のついた口部。そして何より、その口部の両端にあるクワガタの様な2本の鎌の形の巨大な顎。その顎は2人の鮮血に濡れながら、目の前に獲物2匹に向けられている。

そして他に特徴的なのが、そのムカデ型の化け物の節同士の隙間や口から漏れている黒い炎の様なモノだった。それはゆらゆらと風の影響を受けている様に揺れ、炎と同じように天に向かい、天に向かえば向かうにつれてその勢いは小さくなっていた。

化け物は2人に咆哮を浴びせ、禍々しき眼光で2人を見下ろす。

「出ましたよ郷さん……どうするんですか……」

「どうしたもんかね、こりゃ……」

焦る男に対し郷は案外落ち着いている様子だった。しかしそれは焦りを表に出していないだけの事で、郷自身はかなりの焦燥感をその身に感じていた。実際、彼の頬にはスーッと汗が垂れ、表情が僅かに引きつっていた。

「まさかこんな大物の喰魔が現れるとは思ってなかったからなあ……。まあ市街地の真っ只中じゃ無かったのが唯一の救いか……」

「コイツ、どう考えても凶域の『式』には達してますよね……。最近おかしく無いですか？『式』なんてそうそう出るもんじゃ無かったでしょ……ついこの間も『式』の喰魔が現れて当主も含めた七家の鬼人が十数人でようやく倒したって言ってませんでしたか……」

焦りからか男は早口になり、鬱憤を晴らそうとしているのか言葉が段々と荒くなっている。

ちなみに『凶域』とは、鬼人たちが喰魔の戦闘力を測るときに用いる強さの段階

の事で、凶域は全部で5段階に分けられている。最下段、つまり最も戦闘力の低い喰魔は凶域「伍」と評され、そこから「肆」、「参」、「式」、そして「壹」と数字が小さくなるにつれてその戦闘力は増していき、「式」と「壹」の喰魔は1体でも街1つは軽々破壊するだけの戦闘力を秘めていると言われているのだ。

しかし男の言ったように、ここまで巨大で危険な喰魔は人が生きるこの世界、此岸にはそう滅多に現れない。まずそもそも凶域の「式」の段階に到達できる喰魔の数は圧倒的に少なく、短期間に複数体が此岸に現れることはこれまで無かったはずだったからである。

「俺たちの知らない何かが起きれるのかもな…そんなことよりとりあえず、今はここをどう切り抜けるかだ」

2人は言葉を交わしながらもムカデ喰魔から一切目を離さず警戒を続けていた。対するムカデ喰魔は2人を見下ろしながら顎をガギッ!!と何度も交差させ、2人に狙いを澄ましているように見える。しかし、ムカデ喰魔は奇妙にも2人に攻

撃を仕掛けようとはしていない様にも見えた。先程から2人が言葉を交わしている間に一度も襲い掛かろうとしないのも不自然に思える。

「コイツ：何か狙ってるのか？」

その不自然さにいち早く気がついた郷は、ムカデ喰魔に意識を向けつつ視線を周囲に向けた。今郷の周囲には郷と同じ辻凧の鬼人である男、そして目の前に凶域の式と推測されるムカデ喰魔、更にその周りにはムカデ喰魔の出現によって崩れた工場跡、剥き出しの鉄骨やコンクリート柱は既に折れている物やヒビ割れ始めているものもあった。

そして郷がふとムカデ喰魔の右側後方にあった工場3階のコンクリート柱に目を向けると、そこには郷たちと同じようにムカデ喰魔の撃退に來た兎宮家に在する女の鬼人がライフルをムカデ喰魔に向けているのが目に入った。どうやら彼女は一度隠れて傷の応急手当をしたのちにあの場所に向かい攻撃の隙を窺っているようで、銃口は今にも火を吹きそうな様子だった。

「(アレはさっきあいつが言ってた兎宮の…確か負傷したと言っていたが、無事だったか)」

郷は兎宮家の存在を確認し、多少ではあるが2人のみだった状態からの解放に安堵する。更にあの位置からならば、目が全て前方についているムカデ喰魔からは完全に死角になっているため撃つ瞬間まで気づかれることは無いだろうと郷は考えていた。

「(とにかく、3人で囲みつつヒット&アウエーを繰り返せば増援の到着までは持ち堪えられるだろう、まあ多少の怪我は覚悟しないとか…過剰労働だねえ全く…ん？さてよ、3人…?)」

しかし安堵したのも束の間、郷はある事に気付いた。すぐに郷は右耳につけたインカムを操作し、ムカデ喰魔を狙う兎宮の女鬼人に通信を繋いだ。

「射撃中止！ 奴の狙いはお前の位置を確認することだ!!」

郷が気づいた敵の狙い。敵はなぜ目の前にいる自分たちに攻撃を仕掛けてこないのか、なぜ一定の距離のまま襲おうとする仕草すら見せないのか、敵は自分たちが思っているよりも遥かに高い思考を有していたのだ。

しかし、郷の気づきも虚しく、兎宮の女鬼人の持つライフルから弾は発射されてしまった。命令を出すのがほんの数秒遅かった。

工場跡にダァン!! と大きな銃声が響き渡る。しかし、銃声が完全に消える前に、別の音が再び工場跡に響いた。

キィィー————ン!!

それは硬い鉋物同士がぶつかった音。甲高く辺りに響いた音は郷たちの耳を刺した。

「嘘だろ……」

郷の隣で男がそう呟く。形勢逆転をかけて放たれた一撃はムカデ喰魔の鋼鉄の如き外皮に阻まれ、ダメージを与える事すらも出来ていなかった。

ムカデ喰魔は鋭い顎を横に大きく開きながら、身体を捻り右後方を向いた。ギョロツと赤黒い6つの瞳がライフフルを放った兎宮の女鬼人に向けられる。

「……ッ!?!?」

ムカデ喰魔の瞳に睨まれた兎宮の女鬼人は刃物で刺されたような強烈な悪寒に肩を震わせた。

形勢逆転。郷の考え通り、ムカデ喰魔の目的は位置不明の3人目をおびき出すこと。相手の人数が確定しており、現状で敵全員の位置が確定していない場合は下手に動かず真っ先に不確定要素を排除できるように動く。それはまさに戦場に置いての鉄則。

3人は完全なる思い違いをしていた。喰魔とは本来人間のような理性や高度な思考能力を持つことは無く、野獣のように本能に従って行動するのみとされていた。しかしその前提は今まさに3人の目の前で覆され、3人は完全にこの怪物の掌の上で踊らされていた事に死の瀬戸際になってようやく気づいた。

絶望。その一言。このまま抗ったところで10分と持たないだろう、そう各々が己の死を覚悟する。

「どうせ… どうせ死ぬなら…!! ウオオオオオ!!」

男は自らの死を目前に思考を放棄した。男は武器も持たず、ただ真っ直ぐに、今まさに兎宮の女鬼人に喰いかかろうとするムカデ喰魔に向かって走り出した。それは現実逃避か、はたまたトチ狂っただけなのか、答えは分からないがその行動はただの無謀という事だけは分かった。

その時、郷は自分の部下の無謀をただ目で追う事しか出来ずにいた。郷自身、もはや打つ手無しのこの状況に諦めかけたまさにその時、郷のインカムに突然通信が入る。

『……………』

「……………ッ！」

通信内容を聞いた途端、郷の表情に僅かだが光が戻る。

「待て！」

郷はすぐさま無謀に飛び出した男に制止をかける。男は郷の制止を聞いて足を止めるが、その顔には「何を言ってるんだ!？」と言わんばかりの表情。そんなことをしている間にもムカデ喰魔は兎宮の女鬼人に向けてその口と顎を大きく広げて迫る。

「——ッ」

男は堪らず目を瞑ったまま顔を逸らす。

ギュラァァ………!!!!???

が、男の耳に聞こえてきたのはムカデ喰魔の悲痛の叫びとも言える咆哮だった。男はその叫びを聞いて堪らず目を開き声のする方へ向ける。そこにはゆっくりと回

転し、赤黒い血液を空气中に撒き散らしながら空中に放り出されたムカデ喰魔の顎の片方があった。

「なっ!？」

痛みで身悶えする敵を見て男は開いた口が塞がらなかった。ドサッ!!と音を立てて近くに落ちたムカデ喰魔の顎を見て男は気付く。斬られた顎の断面は見事なまでに真っ直ぐで、柔らかい体節の隙間を完璧に捉えられていた。

「∴現場到着。対象喰魔、凶域“式”。民間人へ被害無し」

その淡々とした報告を聞いて男は初めて気がついた。その人物は音も気配も無く、突然男と郷のすぐそばに現れ、右耳を押さえながらムカデ喰魔を見上げていた。

2人の前に現れた全身を黒の衣服で覆い、顔を不気味なペストマスクで隠した

人物に男は自然と視線を向ける。その手にはムカデ喰魔の顎を落としたと見受けられる刃物は握られておらず、男は疑念に駆られながらも一変した形勢に驚き尻餅をついた。

「あ、あ、あいつが…やった…のか…?」

「どうやら間に合ってくれたようだな。全く…お偉いさんは登場もカッコよく無いとダメなのかねえ…」

驚きの連続で口が上手く回らない男、男の元に近づいてきた郷は文句を垂れながらも、その顔には笑顔が見て取れた。正に起死回生。絶望的だった状況に一筋の光がさした瞬間であった。

戦場に舞い降りた1匹の鴉は、血と殺戮、命に飢えた異形の怪物と対峙する。互いに視線を交わす両者。そこにあるのは目の前にいる敵を殺すという意思、殺意の

み。

命の奪い合いが幕を開ける――

※追記解説

月彦がつけているペストマスクには便利な機能が多数搭載されており、通信機能の他に、目の片方のレンズには目標地点までの道のりを示すマップ機能、暗視機能などが備えられています。

こういった鬼人たちが使用するサポート用のアイテムは、主に七家の中で『兔宮家』と『蜜芭家』の共同研究によって製造されています。

此岸ノ鬼

著者 夜十喰

発行日 2020 年 6 月 19 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/196375/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
